

ビバハウス便り NO.76 『こんな私でも、生きていて良いのでしょうか？』

2011年5月31日

ビバハウス責任者 安達 俊子

昨年暮れからの、冬を迎える天候の異常さについては、これまでも度々書かせてもらった。そしてようやく迎えた待望の新年ではあったが、その後の天候もまたまた怪しいものだった。一年で一番雪が多く、寒いはずの2月が、雪が少なく、ぼかぼか暖かい、寒さに弱い私は、ほっとしたいところだけれど、なんだか心が休まらない。案の定、春の気配が一段と強まるはずの3月、4月の気温の不安定さが、体調の悪さに繋がった。どうもこれは私ばかりではなかったようだ。

この自然界の異常の極まりが、『3月11日』だった。私たちにも身近な多くの人々がいらっしゃる東北・被災地のことを思えば、身につまされる想いだ。いまだに自宅が全壊し、親族のところに身を寄せていられる方もいるほどだ。この自然界の異常のきわまりに、日本の歴史初と言うべき人間界の異常が重なったのだ。すでに1988年に『東京に原発を！』という著書を書いた広瀬隆氏は、『福島県の子供たちを、少なくとも100キロ以上離れた所に、最低でも2年以上避難させなければ、子どもたちの将来に重大な健康被害が出る』と提言している。

専門家としての広瀬氏の福島の子どもたちへの危惧は、現に福島県郡山市で、不登校や引きこもりの若者たちのためのたまり場、NPO「ホットスペースR」を運営している、宗像さんの、母性としての本能的な恐怖にも連なるものだ。宗像さんは、最近口を開けば、『郡山の子どもたちを、ひとりでも多く北海道・余市に連れて来たい。』といい続け、実際にそのための行動を続けている。これまでの『ビバハウス便り』にも書いてきたが、3月11日以降だけでも、すでに3期生5人中2人が訓練を受けていて、4期生定員12人のうち2名が今日ビバハウスに着き、6月20日の入所式に備えている。さらにこれからも参加者がいるとの事だ。

こんな受け入れもあり、てんてこ舞いをしてきた今から10日ほど前に、長沼町から来ているN子さん(26歳)から突然、「長く小説を書いている、賞に応募したりもしています。震災前に書きましたが、その後の自分の状況を表しているし、一番自分らしいので読んでもらえたらと思います。」とのコメントつきで、一遍の文章(24ページ)を渡された。表題を見ると『雅良(まさら)は、雅良がいません。貴方は雅良が要りますか?』となっており、少し読み始めてみたが、全く歯が立たない。文学好きの尚男おじさんに選手交代してもらった。さすがのおじさんも、『こんな創作には出会ったことがない、ひょっとするとすごい作品かも分からない』と幾分興奮気味。文章の作り方が完璧の上に、ギリシャ、ローマから、持統天皇までが出てくるかと思えば、フランス語、イタリア語、ドイツ語、はてはベンガル語までが使われている。「雅良」という、時空を超えた、ほとんど正体不明の主人公は、『自分自身にも必要とされないほど、半人前で、正気じゃなくて、役に立たない人間でも生きていてもいいのですか?』とのきわめて重たい質問を我々に投げかけている。